

MAY 18 1928

こぼれに愛

一幕一場

秋田盛雄

加来正夫 皮負

妻 敏子 女 玲

娘 静子 六才位

西村一郎 神土賭博者

山田珠江 女給

谷本繁三 支那人シの主人

現代

加川 羅市 正夫の宅

田卓を圍んで食事最中の臺所にいて、正夫

敏子は、娘を挟んで並ぶ。一郎は其を向へ

に珠江と並んでゐる。

正夫、一郎 共に斗なり酔つてゐる。

正夫（愉快に、盃を一郎に差す） さあ

へ敏子に向つて）今夜はお禮にう人と飲ん

でもうあなくちやならぬ、さあ、一杯。

舞に おおとくく甘く 谷車さく、お初位
書人すこ

西村 (老い、金で、後美、たう) そうた友あ

土曜日も日曜日は例年の倍こしも、千白

風やリンのハーフですかたあ、カワロバ三

十何の三十物ひすか、そ人た七の、やう

か来 (仲お警署におに) 書人ます友あー

敏子、そりや書人ます友、りも、西村をちう

と43)

目

西村 何酒言ふたあ、(おうた老婦をす)

酒席にやうた人ひ、結局一杯一杯他の

ちうひす

か来 樽酒言ふ人こ、言ふぬふ、又俗たいうた

木人ぬ等たう

西村 ぬ等にはか友中人です友あ、(およこ

言うこ) どうも、日美市民の大がたますひ

、てりつた一番仕事か悪いひす

お初位 全く、アタリか生本の不良にまぢやあ

之、舞にさく、お初で、若う書人、お小も

乙木も

まゝ（まゝ）

廿二世なん（困）りもの（ひ）

やう

加来（か）めさ

（あ）かぶ（やう）に

廿二世

なんか、移（うつ）せり

（廿二）

（白）

目（め）皆（みな）友（とも）食（た）事（じ）を

（は）ま（つ）け

（白）

飯（い）子（こ）畑（はたけ）を

（は）ま（つ）け

（白）

珠（たま）に（お）お（お）之（の）

西（にし）井（い）さん 飯（い）子（こ）（か）ぶ（やう）に（ひ）

コ（こ）り（で）道（みち）分（わ）る（る）ま（す）

（お）お（お）

言（い）ひ（ま）す（や）う（け）方（か）り（お）

西（にし）井（い）（急（いそ）に）あ（あ）う（た）ま（つ）た（お）ま（つ）

やあ 加来（か）

さく お（お）お（お）日（ひ）子（こ）を（お）お（お）

お（お）お（お）さく（さく）の（や）う（け）方（か）り（お）

（お）お（お）さく（さく）の（や）う（け）方（か）り（お）

（お）お（お）さく（さく）の（や）う（け）方（か）り（お）

（お）お（お）さく（さく）の（や）う（け）方（か）り（お）

（お）お（お）さく（さく）の（や）う（け）方（か）り（お）

（お）お（お）さく（さく）の（や）う（け）方（か）り（お）

（お）お（お）さく（さく）の（や）う（け）方（か）り（お）

（お）お（お）さく（さく）の（や）う（け）方（か）り（お）

（お）お（お）さく（さく）の（や）う（け）方（か）り（お）

銀工入り来り。同

銀子（西打¹²）熱い久が、（煙草を吐す）

西打 やあたいさく（煙草を吐す）

同

銀子（お茶に）静子はよく睡つて来す

加来 そろり今夜はゆくりいさ

殊に（二人の會話を取つて）そう睡つていま

う、何と言つても子供は可愛いわ。（銀

子¹²）ちやうど来し、パンにハ

4はど、殊に立ち上る

銀子（指差して）直ぐ、その方を行く

の 方を見せ 右側のスイングを解いて

よ

殊に サンヤエ（向ふへ行かぬ）（奇

所を去る）

傳い、お茶 甲斐に立つ 電卓に山西、最

子 是向ひとたふ 二人微笑す

銀子 うまく来りつちや

お茶（銀子）うん 大人がスイング主人

になりあわしなうた。

二 貝 在 小 數 忍 不 去 少

加来 (安内) 白くたう書、
ひすち

銀子のとうたあ 西子産心は沖持 新書
ひすち

ひすち 少しも形念無 友もの
ひすち

西村 (安内) 不世時代 無嫌地友等は友
ひすち

いひすち 友あ 和方人か 早く世には友
ひすち

本 父は貧人なり 家ほふり 入
ひすち

し。親の思も知らぬ 世に不孝友もの
ひすち

は方いひすち 半回三回迄来て、友部大と云
ひすち

な人、白乃自身 不孝、可哀相に方り来
ひすち

す友あ



加来 かう友うと云つて半回迄来ても人
ひすち

友 数多友なりて友あ、運命ちゆ土人だ
ひすち

う

加来 本堂に運命なり 家あ 貴方の裏にあう
ひすち

たりも、全く奇縁奇縁とて云ふのい、や
ひすち

う

加来 どうだが、惚々く失きは是に角、
ひすち

ハ、ハ、ハ (音無子)

加来 寢る、平座りに聲を聞かす、
ひすち

加来 (急に立ち上りながら) 俺が、
ひすち

白くを割し

同

の
~~長~~
目
を
持
た
し

西打 笑 哭 何 不

ち
や
う
た
す
う
か
り
頭
を
抜
く
本
う
ち
や
う
た

の
よ

$\frac{1}{2}$
 $\sim$
 $,$
 $\pm$

88
5
本
た
億
等
だ
も
9

和事人

知ろふに
酒の十一
飲牛心
女字は

て
五
十
の
額
を
見
る
五
十
に
く
む

回

珠に もう切り上げ帰るかゝる、

五村 余り姑々たのびあそ

珠に うそ、胸が悲しくな、村ゆつた。寄る、

余り めう かろーのび、

かま入り来、 白告に珠に立す上

珠に (五村をうたあそ) どうも随分びぢる

に古り来、 左もかたわけやうと

了

かま、 けい、です、 (別) 珠にさく、 んの

書、 うゝゝゝ、 手てよでさかると

板林、 かります、 (書の上) あ、

あま、 (返事かきあひます) へい

かま、 もう帰る、 へい

あま、 (さういふ) とう、 まあ、 けい、

珠に、 (さく) 珠にさく、 珠に

珠に、 一、 言

あま、 珠にさく、 とう、 けい、

珠に、 (さういふ) とう、 けい、

あま、 寄る、 けい、 寄る、

あま、 寄る、 けい、 寄る、

西村 とも 仲介^{ちゆうかい}になりまー
賀 西村^{さいむら}さう、珠^{たま}に外^{ぐわい}をさす。

加来^{かき} やうくりしとくう、いや木^きがうの^のに(金子^{かねこ}に)

おうどういこわう人^{ひと}た、早くいなりか

金子^{かねこ} (若^{わか}をさる^{さる}か) 今^{いま}来^きますよ

善^{ぜん}様^{やう}とこおまーたの、
ナリ人^{ひと}の^のを

金子^{かねこ} 辞^しをたがうま。

珠^{たま}に(金子^{かねこ}はよりきり辞^しを極^{ごく}) 目^め入^いて

め^めに辞^しやうく 書^かく書^かくおまの 辞^しや

くはソリこたのあー(辞^し子^こは接^{けつ}分^{ぶん}する)

辞^し子^こ知^ちつておわトる、 目^め入^いる。

加来^{かき} 金子^{かねこ}に 辞^しをたがうやうにうなす

金子^{かねこ} (珠^{たま}に外^{ぐわい}をさすの^のに) 辞^しやうく

無^むちやうにまー うー、おわーさうやあ

人^{ひと}に、おわーさうひーなさー

西村^{さいむら} ちやあ、おわーさう、

加来^{かき} 何^{なに}もか、

加来^{かき} 西村^{さいむら}と手^てする、傍^{はた}に珠^{たま}に接^{けつ}接^{けつ}

金子^{かねこ} またううう、や、珠^{たま}にさう、おわーさう

事^{こと}とてあえ

